

歴史研究の方法を学び、歴史認識の深化をめざす歴博見学会

千葉県立千葉女子高等学校 榎澤 和夫

1. 実施学年：高等学校第3学年 教科・領域：特設授業、進路・歴史学習

2. 学習のねらいと博物館との関連について

①**主題名** 歴史研究の方法を学び、歴史認識の深化をめざす歴博見学会

②**ねらい** 大学で歴史系の学部に進学したいと考えている生徒を対象にして、

1. 研究者の研究方法を体験することで、歴史学や民俗学、博物館学に対する興味・関心を高める
2. 問題意識を持って展示解説を聞き、教員や研究者と質疑応答を行い、歴史認識を深める

- ③**博物館との関連**
1. 教員による展示解説
 2. 歴博の研究者による展示解説

3. 指導計画

	時間	学 習 内 容	指導上の留意点
展 開 ①	60分	<ul style="list-style-type: none"> ・第3展示室（近世）の「国際社会のなかの近世日本」に展示されている、屏風などの絵画史料を中心に教員が解説を行う。 <u>江戸図屏風</u> Q.いつ制作されたのだろう。 Q.江戸の人々は通信使をどのように見ていたのだろう。 <u>江戸時代のイメージ</u> Q.江戸時代はどんな時代だったのか。 <u>対朝鮮外交</u> Q.なぜ日本人は釜山までしか行けないのだろう。 <u>対アイヌ交易</u> Q.アイヌはなぜ着物を左前に着ているのだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示を解説するだけでなく、「問い」を重視し、「なぜ…」「どうして…」と生徒に投げかける。 ・何が分かれば年代が特定できるのかを考えさせる。 ・通信使行列を見せる幕府の意図を考えさせる。 ・「国際社会のなかの近世日本」展示を概観し、展示者の意図を考えさせる。 ・日朝「対等」「友好」外交の構造を理解させる。 ・近世日本人が持っていたアイヌに対する差別意識を捉えさせる。
展 開 ②	45分	<ul style="list-style-type: none"> ・展示室を自由見学し、「変だなあ」「おかしいなあ」と思ったことをワークシートに記入する。 ・疑問に対する、自分の考え（仮説）を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示を漠然と見るのではなく、目的意識を持って見ることを強調する。

展 開 ③	60分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者が展示解説を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートに記入された生徒の疑問に答えてもらうことを中心に展示解説をお願いする。 ・ 研究者と生徒との間で質疑応答ができるように、生徒への支援を行う。
-------------	-----	--	---

4. 実践の概要

〔展開① 教員による展示解説〕

第3展示室に展示されている、「江戸図屏風」や「寛文長崎図屏風」、「四季農耕図」など、絵画史料を中心に展示の見方を教員が解説する。解説だけにとどまるのではなく、「なぜ」「どうして」と問うことで、史料に対して「問い」を持つことの大切さと、その問いを解決していくための論理的な思考力の重要性に気づかせる。ここでは、第3展示室の「国際社会のなかの近世日本」における展示解説の様子を報告する。

研究の方法を学ぶ

展示を使って、歴史学の研究方法を学ばせたいと考え、次の発問を行った。

Q. 江戸図屏風が製作されたのはいつだろう？

屏風に描かれているもので、作られたり、または、なくなったりしたものの年代が明らかかなものを探せばよいことを指摘する。

(ヒント1) 今はないけど、江戸時代にはあったものに注目しよう→江戸城天守閣

江戸城天守閣は、明暦の大火(1657年)で焼失し、その後再建されなかったことから、この屏風絵は1657年以前に制作されたものであることがわかる。

(ヒント2) 作られた年代が明らかかなものに注目しよう→徳川秀忠(台徳院)の墓

徳川秀忠(台徳院)の墓があることから、秀忠が亡くなった1632年以降に制作されたものであることがわかる。

つまり、「江戸図屏風」は1632年～57年の間、3代将軍徳川家光の時代に制作された可能性が高いということがわかる。ここで生徒に「謎解き」の面白さを実感させたい。

通信使行列を見せる幕府の意図を考える

「江戸図屏風」のほぼ中央、朝鮮通信使が江戸城に向かう場面に注目させた。

Q. 江戸の人々は通信使行列をどのような思いで見っていたのだろうか？

朝鮮通信使の行列が、屏風の中央に描かれているということは、屏風を制作した(させた)側の強い意図を感じることができる。その意図を江戸時代の人々の立場に立って考えさせようという問いである。問いが漠然としているので、「ああ、なんて・・・」と答えるように指示をした。

(例) 「ああ、なんて珍しいものを持ってきているんだろう」

「ああ、なんて変わっている人たちなんだろう」

「ああ、なんてファッショナブルな人たちなんだろう」

「ああ、なんて平和なんだろう」

「ああ、なんて将軍様の力は偉大なのだろう」

徳川家光の存在が至るところで暗示されている、というこの屏風絵の政治的な意味を考えさせることと併せて、通信使行列が将軍家の権威を示す一大イベントであったということに気づかせたい。

江戸時代のイメージを確認する

「国際社会のなかの近世日本」の展示を概観させた。

Q. 江戸時代とはどのような時代だったのか、「○○な時代」というように、イメージを言ってください

(例) 「武士の時代」

「土農工商、身分がきちんと分かれていた時代」

「百姓一揆がたくさん起きた時代」

「みんな着物をきて、男はちょんまげをしていた時代」

「鎖国をしていた時代」

Q. 「国際社会のなかの近世日本」のコーナー全体を見回して、博物館（展示者）が何を示したかったのか、その意図を考えてみよう

(例) 「江戸時代の外交関係を示したかった」

「外国の使節が日本に来ていることを示したかった」

「日本がいろいろな国と交流しているということを示したかった」

博物館展示を見る際に、展示されているものを個別に見ることが多く、展示されている「もの」と「もの」との関連や、展示物を総体として見せる工夫はいままで少なかったように思われる。その点第3展示室は、4つのコーナーがそれぞれテーマを持っており、そのテーマを追究させることも生徒に取り組ませたい。特に「国際社会のなかの近世日本」のコーナーは、東アジアの地図の前に立てば、江戸時代の外に開かれた「4つの窓」を構造的に捉えられるように工夫がなされており、その意図を生徒に読み取らせたい。

対朝鮮外交を構造的に捉える

江戸城で応接される通信使を描いた絵を見せて、日朝対等な関係であったことを確認させた後、草梁倭館の絵図を見せる。

Q. 草梁倭館は、朝鮮王朝が日本との外交や、対馬藩と交易をするために釜山に置いた施設である。江戸時代の日本における「何」に相当しますか

(例) 「長崎の出島」

Q. 朝鮮通信使は将軍の代替わりごとに江戸にやって来るが、日本人はなぜ釜山までしか行けないのだろう

生徒から意見が出なかったので、朝鮮にとって豊臣秀吉の朝鮮侵略の記憶が強烈だったこと、だからこそ朝鮮国内向けには、対日関係を貿易関係のみにとどめておきたかったことなどを指摘した。

通信使に象徴される対朝鮮外交は、対等で平和な関係として捉えられることが多いが、そう単純ではないことをつかませたい。幕府が朝鮮使節団を江戸（または日光）まで招く政治的な意図、朝鮮王朝が日本との交易を釜山に限定した理由などを生徒に考えさせるこ

とで、日朝関係を構造的に捉えさせる試みを行った。

アイヌに対する差別意識を読み解く

アイヌ絵をじっくり見せる。

Q. アイヌ絵の描き方には特徴がある。挙げてみよう。

(例) 「日本人は眉毛がつながっていないのに、アイヌはつながっている」

「アイヌは毛深く描かれている」

「襟の袷が左前になっている」

Q. アイヌ絵を見ると、アイヌは着物を左前に着ているが、実際は逆（明治初年に撮影されたアイヌの写真を見せる）である。なぜ、わざわざ左前に描いたのだろう。

(例) 「死んだ人は左前に着せるというから、不吉な人たちという気持ちで描いた」

「女性の洋服は左前なので、日本人とは違う外国人という意味で描いた」

アイヌ絵は近世日本人のアイヌ観を知るうえで貴重な史料である。蝦夷錦をまとった「夷酋列像」（高校の教科書や資料集に取り上げられている）に描かれているアイヌのリーダーたちが、「三白眼」「左前」で描かれていることからわかるように、「野蛮な」民族として意識されていたことがわかる。

〔展開② 「変だなあ探し」〕

展開①で行った、展示に対する見方、問いの作り方をふまえて、生徒自身がワークシートを持って、「問い」を発見する作業を行う。また、その「問い」に対して、自分なりの見解を示すことも指示する。

「たのしい！？歴博見学会」 ワークシート

Q1. 第1展示室（古代）で「変だなあ探し」をして下さい。「気になったもの」「何だコレ」と思ったもの、「なぜ○○○になっているのか」と考えたものなど、2つ見つけて下さい。

(例) 武士の館にサルがいるのはなぜ？

① _____

② _____

Q2. 自分が見つけた疑問に対して、自分なりの考え（仮説）を書いて下さい。

(例) サルの近くに馬がいるので、馬と関係あるのではないか。武士にとって馬は大切なものだったので、サルは馬を守る力がある動物と考えられていたのかもしれない。

① _____

② _____

_____ 年 組 氏名 _____

〔展開③ 研究者による展示解説〕

生徒から回収したワークシートを研究者に渡し、ワークシートに書かれた疑問に答えることを中心として、展示解説をしてもらった。回答がなかった疑問については、後日教員が答えることにした。

【生徒が探した問いと仮説】（生徒名は仮名）

（森山）縄文人は弥生時代になってからなぜ背が伸びたのか？

〔仮説〕 近くに展示してあった朝鮮人の骨格と、弥生人の骨格がそっくりだったので、きっと朝鮮とか中国とか、海の向こうから色々な人が日本に住みついたのだろう。

〔回答〕 朝鮮渡来系の弥生人の骨格が大きかったからである。しかし、縄文人の人口の方が多かったので、混血を繰り返していくうちに、弥生時代人も徐々に背が低くなっていった。

（山下）縄文時代で祭り上げられた動物が、なぜ鳥なのか？

〔仮説〕 鳥は動物の中で唯一空を飛ぶものだから、人間には及ばないものだと思ったから、または神様に近いところにいるから

〔回答〕 鳥は神の使いと考えられていたらしい。鳥居はその名残で、鳥が神を連れて降り立つ場所が鳥居となった。

（早野）土器は底がすぼまって立てるのにバランス悪そうなのがあるけど、どうやって使ったのですか

〔仮説〕 穴とか掘って埋めてたのかな？

〔回答〕 正解、土器の下部がそのままの色なのに対し、上部にススが付いていることがその証拠。

（小山）銅鐸に鶴が魚を取っている絵が描かれているのはなぜ

〔仮説〕 他にも高床倉庫の絵や脱穀の様子が描かれているので、鶴を使って漁業を行っていたかも知れない。

〔回答〕 亀と鶴が描かれていることから、長寿や豊作の祈りであると考えられる。

（原口）藤原京は内裏と大極殿・朝堂院が近くであり、場所も都の中央にあるのに、平安京遷都後、大極殿・朝堂院が離れ、位置も中央から離れるのはなぜか。

〔仮説〕 都を作るとき、予定外の増築があったか何かして、東西を広くしたら、中心から宮殿がズレた。大極殿・朝堂院の重要性がなくなった。

〔回答〕 内裏がしばしば焼失し、里内裏に移動、そのまま、御所になってしまった。また、仮説とは逆で、内裏の重要性がなくなったからこそ、中央から外れていったと考えられる。

（大井）墨書土器なぜ墨書する必要があるのでか？

〔仮説〕 呪術的なものか。物に、それが「何だ」ということを直接書く必要があるのかよく分からない。

〔回答〕 土器の底部や側部に1文字だけ書かれている場合が多い。官庁などの所属や使用者、使用目的などが書かれている。また、呪術的（人の顔を書いて病気など

自分の中の悪いものを土器に移して流す) なものとして使われていたとも考えられる。

(原口) 古代官銭はなぜ小さくなっていったのか

〔仮説〕 技術が向上して小型化に成功した。経済が危うくなって、節約のために小型化した。官銭が流通し、持ち運ぶ量が増えたので、軽量化した。

(石上) 皇朝十二銭の大きさが小さくなっていったのはどうしてなのか

〔仮説〕 江戸時代の綱吉の時代のように経済が不安定になってしまったので、なるべくコストを抑えるようにしたのではないかと考えました

〔回答〕 平安時代後半に入ると銅の生産量が低下した。

5. 歴博での学習の成果と課題

ここ数回実施してきた歴博見学会後の生徒の感想を分析し、歴博での学習の成果と課題を述べたい。

①ワークシートが歴史を探求する主体の自覚を生み出した

生徒に展示見学の目的意識(=「問い」)を持たせるための方法としてワークシートを利用した。その際、生徒には2つの課題を与えた。ひとつが展示室のなかで「気になったもの」「変だなあと思ったもの」などを2つ見つけることである。記入の際は「なぜ○○なのか」と書くことを指示した。2つ目の課題は、自分が見つけたその疑問に対して、自分なりの考え(仮説)を書くことである。ワークシートを使った見学についての感想は以下の通りである。

- ・疑問点を探しながら見ると、普段は「すごいなあ」と思う程度で終わってしまうものも、よく分からない点が浮き彫りになってくるので、より好奇心が湧きました。また、ひとつひとつの展示物の細かなところを見たいと思いました。展示物ひとつずつの解説も読んで、それでも尚疑問に思うところを探したので、普段だと読み切らない解説文もたくさん読むことができました。
- ・ワークシートを使って、質問に答えていただけるとわかった瞬間、さらに深く見てやると思い、力が入りました。使わなかった場合、その場で疑問に思っても、違うところを見学した場合、また疑問に感じるところが出て、忘れてしまうところでした。
- ・「何か書かなければ」と「書いたことは解決される」の思いから、ワークシートが無かった場合より、注意深く史料を見ることができた。普通なら見逃す(流す)ところに疑問が持てた。「変なところを探す」のが良かった。ワークシートによる活動があったから興味が持てた。
- ・ワークシートを使わなかったら、疑問点を見つけようとせず、ただ見ているだけだったかも知れない。細かいところまで読んだり気にすることができた。疑問も解決してスッキリ。
- ・ワークシートを使った場合は「どれだけ面白いものを発見し、面白い質問が出来るか」と考え、ひとつひとつの展示物をじっくり見て歩くことができると思います。
- ・多分ワークシートを使わなかったら「うわーすごいねー」で終わっていた気がします。

ワークシートを使うことにより、これは何のための物なんだろうとか、これはどういう意味なんだろうかと深く考察することができたと思います。ただの見学にとどまらず、自分なりに考えてみたりすることができたので、とても有意義な時間だったと思います。

②歴史のイメージが変わった

博物館は常に同じものが同じように展示されているように思われがちであるが、歴史学研究の進展により、その最新の成果が示される場合も博物館である。そういった意味でいえば、第3展示室の展示は多くの生徒に今までの歴史イメージに変化を迫るものであった。

「『色々な国の人のこと知ってたんだっ！！』と思いました。江戸時代はともかく鎖国っ！！というイメージしかなかったので、第3展示室の入り口付近にあった大きな絵に色々な国の人の絵が描かれていたのを見て、『意外と時代遅れしてなかったのかも』と思えるようになりました。」「鎖国で江戸時代は外国とあまり関係をもたなかったというイメージが強かったのですが、国際的だったとわかった時、とてもびっくりし、興味を持ちました。」鎖国イメージの転換を指摘する感想である。また、アイヌに対するイメージにも変化を迫ったことが分かる。「本土にも朝廷の支配がなかった頃には、アイヌ人も住んでいたことに驚きました。アイヌ人は北海道とその周辺の島々で細々と生活しているようなイメージがありましたが、活発に交易していたと分かったのは意外でした。本州に住む日本人が描くアイヌ人の容姿も、野蛮な雰囲気があり、着物も右が上にしてあったりと、かなり昔から差別意識を抱いていたことにも注目です。」アイヌに対する差別の問題を指摘する生徒もおり、ここから、自立した生活を送っていたアイヌが、なぜ日本に支配され、差別されるようになったのか、考えさせることもできよう。

③展示されるまでの過程に興味をひかれた

前回の見学会では、第2展示室で織田信長が岐阜城下に出した「楽市令」の高札（レプリカ）の解説を受けた。「なぜレプリカのような形で復元ができたのか」という話が中心であったが、発見された一枚の板が高札として復元されていく、その「復元過程」に多くの生徒は興味を持った。

「北条家伝馬手形」展示では、北条氏の領国経営（交通網の整備）の典型例として中央集権的な命令が出されたと説明を受けた。また浪岡城（青森）や志布志城（鹿児島）に見られるような郭の並列的な配置と、北条氏の杉山城（埼玉）に見られる本丸を中心とした構造を持つ城との比較から、前者に見られる大名と家臣団との同志的結合関係から、大名権力の強化による中央集権的な家臣団編成へと時代が変化していく様子が語られた。なぜ「北条家伝馬手形」がそこに展示されているのか、そして戦国の城の形態変化とこの文書がどのように関わっているのか、生徒の理解が格段に深まった印象を受けた。

「説明文を読むだけでは、この資料がどういう意図で作られたのか（今回の例では織田信長と北条氏の木製の立て札の違いについて）が実際よくわからないままでしたが、今回丁寧な説明付きの見学でしたので、本当に学んだようになりました」「展示されて

いる物が教授の方々の研究の成果であると思うと、ひとつひとつじっくりと見ていたくなりました」といった感想はそのことを物語っている。

④見学会がさらなる疑問を生み出した

当然のことであるが、解説を聞けば新たな疑問が生み出されてくる。今回の見学会では、次のような疑問が出された。

- ・屏風をいっぱい見たんですが、そのひとつひとつ丁寧に解説してくれて、今まで、ワーすごい！とだけしか見ていなかったのに気づきました。春夏秋冬であったり、将軍とか、動物とか、屋敷とか事細かに描いてあって驚きました。いったい誰が描いたんですか…？それとも数人で仕上げたものなんですか？
- ・江戸の町が描かれた大きな屏風を見たのは面白かった。細かく見ていくとたくさんの要素が入っていて、全部見るにはたくさんの時間がかかるだろうと思った。とても大きなキャンバスに細かな絵を描いていく作業だけど、一人で全部描いたのかなあ？あんなに細かくたくさん描くのはどれくらいの時間がかかったんだろうと思った。
- ・先生が詳しく解説してくださった江戸図屏風が一番印象に残りました。江戸図屏風をあれほど詳しく見たことがなかったので、たくさん発見しました。特に屋敷の一部分に囲いがあり、その中に花が栽培されているのが気になりました。位の高い人への献上用の花園かと思いました。
- ・朝倉氏の住んでいた跡がきれいに残っているという話が面白かった。その場所にあった紙の切れ端から医者が住んでいたことを突き止めた人がいることに驚いた。もうひとつ面白かったのは、お経を書いて埋める話。多くの人がそれを行っただけで、いつ頃まで続いたのか不思議に思った。もうすぐ世界が終わるという考えが変わり始めたのはいつ頃なんだろう…
- ・まず、縄文人が主食にしていた貝について。いつ頃の季節に食べられていたのかは、貝の年輪の幅によって判明すると教えていただきました。この事実は歴史の研究者だけの知識では分からず、貝の生態を知る専門家に教えてもらわなければなりません。他の例を挙げると、放射性炭素の濃度を測定して、物ができた年代を調べるということなども、科学と協力しないと明らかにできないことがあると実感しました。もうひとつ、皇朝十二銭が小さくなった理由は、銅が減ったためであるようですが、小さくなり、価値がないに等しい通貨を作り続けたのはどうしてか、新たな疑問が浮かびました。

今回の実践では、出されてきた疑問を解決する手立てを生徒に示さなかったが、生徒自身に調査させ、レポートにまとめさせることもできよう。

⑤目的意識が博物館見学の楽しさを倍増させる

見学する側の主体的な関わりの重要性を述べた感想が出てきたことが、一連の見学会の一番の収穫であった。「高札の説明が私は印象的で、今まで見たことがある物でも、見方を変えればさまざまな発見をすることができると思った」「一番勉強になったことは、博物館はただ行くだけじゃダメなんだということです。博物館の人たちが、何を伝えようとしているのか、自分はそれを見て何を感じるができるか、という目的意識

がないと本当に博物館を楽しむことができないということを強く感じました」

博物館展示には必ず解説があり、展示する側の意図が明示されている。しかし、読んでもその意図するところが伝わってこない場合（表現が難しいということもあるが）が多い。その原因のひとつが観る側の問題意識にある。「北条家伝馬手形」が、戦国大名の領国経営にとって、どんな意味を持っていたのかという解説があったからこそ、「ここにこのように展示されているのかなぜか」といった「問い」を生徒たちは持つことができた。また、「楽市令」の高札の場面では、研究者の「高札の真ん中に穴が開いているのはなぜか」（釘を打ち付けた穴）という「問いかけ」が、生徒たちに問題を追究する主体としての自覚を高めさせている。

生徒の感想は、自ら「問い」を持つことの重要性を指摘しているが、教員にとっては、生徒に「問い」を持たせるための具体的な方法が求められよう。

歴博利用の最大のメリットは、研究者とともにプログラムが活用できることである。確かに現場の教師が生徒を連れてきて、展示について解説することも重要であるが、生徒たちにとっては、大学の教員から直接お話しを伺えるということに、「ワクワク、ドキドキ感」があり、その点で、すでに興味関心は高まっているといえよう。しかし、研究者からお話を伺うという、一方通行的な関わり方では理解が深まったとは言えない。歴史教育の目的のひとつが、歴史を追究する主体となるように生徒を育てるということに置くならば、まず、生徒自らに問題意識を持つようにさせるのが、現場の教師の役割であろう。今回の取り組みでは、最初に教員が解説をおこない、展示の見方を示した。この解説が、その後の「変だなあ探し」に生きていたように思われる。疑問を持って研究者の解説を聞いたことによって、より理解が深まったのではないだろうか。

6. わたしの考える歴博活用案

①実施対象学年

大学で歴史学や考古学、博物館学などを専攻したいと考えている、高校2年生ないしは3年生（10名前後を予定）

②学習のねらい

1. なぜ展示物がそこに展示されているのか、展示に至る過程（研究過程）を追体験する＝研究者による解説
2. 問題意識を持って展示解説を聞き、歴史認識を深める＝教員による解説
3. 歴史に対する主体的な取り組みの姿勢を持つ＝生徒による「問い」の作成

③事前準備

- ・展示室解説の事前準備として、展示を使った生徒向けの「問い」を作る
- ・生徒に渡すワークシート
- ・歴博の研究者との事前打ち合わせ（生徒が作った「問い」に答えることを中心に展示解説をお願いする）

④指導案

	時間	学 習 内 容	指導上の留意点
展 開 ①	60分	<ul style="list-style-type: none"> ・第3展示室（近世）の「国際社会のなかの近世日本」に展示されている、屏風などの絵画史料を中心に教員が解説を行う。 <p>「問い」の具体例</p> <p><u>江戸図屏風</u> Q.いつ制作されたのだろう。 Q.江戸の人々は通信使をどのように見ていたのだろう。</p> <p><u>対朝鮮外交</u> Q.なぜ日本人は釜山までしか行けないのだろう。</p> <p><u>対アイヌ交易</u> Q.アイヌはなぜ着物を左前に着ているのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・解説するだけでなく、なるべく多くの「問い」を発し、生徒に発言の機会を与えたい。 ・時代像や研究方法、博物館側の展示意図などを聞きたい。 ・何が分かれば年代が特定できるのかを考えさせる。 ・通信使行列を見せる幕府の意図を考えさせる。 ・日朝「対等」「友好」外交の構造を理解させる。 ・近世日本人が持っていたがアイヌに対する差別意識を捉えさせる。
展 開 ②	45分	<ul style="list-style-type: none"> ・展示室を自由見学し、「変だなあ」「おかしいなあ」と思ったことをワークシートに記入する。 ・疑問に対する、自分の考え（仮説）を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示を漠然と見るのではなく、目的意識を持って見ることを強調する。 ・展開①でのやり取りを踏まえて、「問い」作りを行わせる。
展 開 ③	60分	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者による展示解説を行う（教員による展示解説同様、特定のコーナーや展示物に絞って解説を行う）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入された生徒の疑問に答えてもらうことを中心に展示解説をお願いする。 ・研究者と生徒との間で質疑応答ができるように、生徒への支援を行う。 ・教員や研究者の解説を聞いて納得できなかったことや、新たに疑問に思ったことなどを生徒に追究させ、レポートにまとめさせたい。